

一、四大主義概説 出口日出磨 尊師
緒言

この四大主義は、われわれのみの四大主義でありませずして、どこへ、どういう時に出しても、時と場所とに関係なく間違いない普遍の真理であります。

四大主義は清潔、楽天、進展、統一のこの四つをいうのであります。四つの大きい根本の行き方というような意味で四つ相関連して、そこに深い意味があり、連鎖があります。

すなわち、われわれは清潔であってはじめて楽天的な気持ちになれる。楽天的な気持ちになってほんとうに進展というものがある。しかし何があっても統一がなかったならば、天地も、社会も、家庭も、一身も成り立たない。そういうわけで、この四つは相互に関連しているのであります。

清潔主義

清潔というのも単に目に見える物質方面のみでなしに、霊的な方面、心の方面、目に見えない方面をも含めているのであります。霊体不断の修祓というふうに要約してもよいと思います。清潔という目に見える方面、身体とか、物質とかいう方面にとられ勝ちであります。そればかりでなしに、その根本の霊という方面が大事である。その両方の不断の修祓、すなわち絶えざるお浄めであります。

「不断」というのは、いつも天地は絶えず清潔を行っております。雨が降るのも一面、清潔法であり、風が吹くのも火事がいくのも清潔法であり、そこに邪気がたまれば、それが何かによって散じて、自然の清潔法はいつも行われているのであります。それで「不断」というたのであります。清潔を宗教的な意味で修祓というのであります。修祓、修斎、潔斎・・・いずれも「きよめ」ること、「みそぎ」すること、「はらい」をすること、つまり清潔の意味を宗教的につかった文字であります。

さて、皆さんの中で毎朝起きて顔をあらわれない方はない。また尾籠な話であります。話であります。日に一度や二度、大小便をなさらぬ人はないはずであります。女の人なら鏡を見ないという人もない。三日に一度ぐらいは風呂にはいらぬ人も、まず稀であろう。またどこの家でも、一日に一度ぐらい、さいはらいをあて、箒で掃かないという家も少ないと思います。それほど掃除をしておつても、ともすれば座敷の隅やら障子の棧には塵埃がたまっている。知らぬ間にたまっている。で、一年に一度や二度は特別の大掃除をせねばならぬのであります。天地においても同様であります。時々清潔法が行われている上に、定期または臨事の大掃除が起こるのであります。

目に見える身体とか家とかを、それほど掃除しておつても塵埃がたまりやすい。目に見えぬ心の方の掃除を、われわれはどれだけしているでしょうか。顔をあらう程度に毎日こころをみがいでいるでしょうか。鏡を見る程度に毎朝省みているでしょうか。あるいは春秋の大掃除ほどに、ときどき潔斎しているでしょうか。身体ばかり、目に見えることばかり一生懸命になつていても、目に見えぬ心の方面の掃除はちつともしていない。自分にたまつた塵埃くたには気づかず、目にほこりがあることは知らずに、世の中はきたない、臭いというようなことばかり言っている。あにはからんや、自分の身体に垢がたまっている。それはちょうど自分が垢をためているから虱や蚤が湧く。それを自分が不潔にしていたから湧いたのを、そんなことはそつち

のので、蚤や虱を親の敵のように思って、悪口ばかりいうているのと同じことでもあります。世の中にはそういうことが一面、多いのであります。つまり私の申しましたのは、見える方の掃除はしやすいが、目に見えぬ方の、心の掃除はおろそかになりがちである。見えぬ方の掃除は見える方よりは、より以上に懸命にしなければならぬ、心掛けねばならないということを示したのであります。

つぎに、天地自然の潔斎について申し上げます。これを三つに分けて、大潔斎、中潔斎、小潔斎とすることができます。

大潔斎というのは天地六合の大掃除で、大地震とか大洪水とかいうのは、その潔斎をするさいはらいであり、箒である。

中潔斎といえますのは国家、社会の大掃除で、戦争とか流行病とか火事とか飢饉とか、そういうようなのは国会社会のさいはらいであり、箒であります。

小潔斎というのは、一身一家の掃除であります。

しかも、これらことごとくは、必然的神律の発動であって、決して無意義にあるのではないのであります。人間がご飯をたべて、その滋養分を吸収すれば滓がたまると。その滓はどっかに出さねばならぬ。これはわれわれが毎日やっている。またお互いに恨み合ったり、叩き合ったり、そういう気が凝ればそれが社会全体へ影響して災害を起こす。またそういう塵埃がながい間たまってくれば、それが引火点に達して急にならぬ禍を起こすことがある。つまり、すべての災害は邪気に原因がある。

では、この世は神さまがお造りになったのなら、悪い気をつくらぬようになさつたらよいのにと簡単に思いますが、活動があれば必ず反面には滓がたまると。人間が一生懸命に何かをすれば、疲労物質が身体にたまると。一生懸命に考えれば精神方面もそれだけ濁ってくる。これはやむをえない。活動があり、そこに行為があれば必ず滓ができる。不消化物ができる。いわんや、造化の発端に位する不完全きわまる地上現界においておやであります。人間が歩いた、歩いたということは結構であります。地を踏むためには蟻の一匹や二匹は踏み殺すかもしれない。草の一本や二本は踏みにじるかもしれない。それはやむをえない。

そういう具合に、動きがあれば自然に――故意の悪じやないが、ある犠牲がともなう。ただその犠牲が、より善いもののために、より以上のもののために払われる時は善である。結構である。とにかく、動きがあれば必然的にそこに犠牲がはらわれる。一種の残滓ができる。それが正当に行われているときは小さい潔斎です。汗が出たら拭うとか、また水を飲むとか、新陳代謝で大きな潔斎でない範囲です。あります。食い過ぎて下痢をする、あるいは脳をこわして病気になる。これは少々大きな念のいった潔斎を要する。

これがやはり国家社会にもあり、天地六合にもある。不断の、少しずつの潔斎であれば、目に見えぬ小さいことであるが「こり」が溜まって大きなことになる。天災地変というものは、そういうものである。ふつう雨が降ったり日が照ったり、新陳代謝が簡単に行われる。秩序立って行われておりますが、それがそういうような大きい「こり」が爆発するという状態も世の中にはあります。やむを得ないそういう簡単な、正常な潔斎は結構である。これはやむを得ないが、大きな病とか大きな地震とか、異常な大変は一身一家にとつても、国家社会にとつても、全体にとつても、それはこまる。人間において避け得られるだけは避けるべく注意せねばならぬ。で、信仰があれば早く神意がわかり、神意にかなった行動をなす。そうすれば比較的不消化物をつくらぬ、汚れを積みぬことになるから、したがって、そういうような大きな潔斎

はなくてすむようになるべきものである。ところが現在は、生活のためのやむをえない犠牲とか、滓とかと
いうようなものでなしに、むちゃくちゃなめぐり、ふつう以上の滓をだしている。そのために、世の中が非
常に苦しんでいるということをご承知ねがいたいのであります。

人心と容貌、あるいは素振り、言行、——そういうものはことごとく惟神に相応しているものである。
これは誰にもわかることであります。これは一身に関する現象であります。一家にとつても誰か一人腐敗
分子があり、非常な重病人があつたとすれば、一家はやはりその苦しみを感じるのであります。また社会に
しても同じことである。社会に争闘があるのは、争闘を起こすような原因がある。邪気が発生しているなら
ば、その社会全体はその気を感じる。ゆえに心身の清潔法は社会共同の責任であります。

きたない話ばかりしますが、便所のツボにはうじ虫がわく、溝には溝相応のものがわき、きれいな水には
きれいな魚が住む。空気の良い所、あるいは非常に景色の良い所、そういうところにいる人はかならずその
影響をうけてよい気持ちになっている。環境、食物等の影響——これが人間には非常に大事であります。
皆さんでも、おる場所によつて気持ちが違つてくる。また、自分と向かい合っている人によつて違う。景色
のよい所におれば、景色の悪いところにいるより、よい気持ちになる。また自分と気の合う人と一緒にお
れば、だまつておつても楽しく、愉快である。ところが自分の気に合わない人、顔を見てもしゃくにさわる
人といると、どうも面白くない、いけない。で、よい環境に恵まれること、たとえば霊地というようなこ
ろで、神さまのお話を聴くというようなことは非常にその人にとつて得である。結構なことである。知らず
しらず清潔法、潔斎が行われるわけでありませう。

食物の影響——これも専門的にいいますと、なかなかむつかしくなりますが、元来、日本人は西洋人と
違つて血が清らかである。今まで、あまり肉を食わなかつた人種であります。氣候の点からいつても、獣肉
類はそう日本人にはふさわしいものではないのであります。このごろは医者はあまり肉食をすすめなくなり
ましたが、ああいうものは「精」が強い。一時は養分になります、それだけ毒になりやすい。腸の中で腐
るといふと非常な毒となることがある。

肉類を多く食う人は性欲が強かつたり、気持ちが暴かつたり、忍耐力がなかつたり、そういう結果になり
やすいものである。概していえば、植物性の物を主にした方がほんとうである。また食物というものは、み
な気がはいっている。そこらつきようがあつても、みかんがあつても、米があつても、みなその土地の気
を含んでいる。植物独得の性能によつて、それを吸い寄せている。その気を人間が食うのでありますから、
栄養は多い。古いものは気がぬげがちですから、新鮮な食物をえらぶことが大事であります。

ところで、上から来る気というものは、神霊の世界に接し、そういう気を多量に受けるといふことが人間に
いちばん大切であります。で、ほんとうに信仰がすすみ、神さまからの気を始終いただくように心掛けてい
ると、だんだんと身魂の借錢なしができてきて、気持ちもほがらかになつて来ませう、心より愛善的な活動がで
きてきだすのであります。

自分が邪気に犯されているかいないかを知るためには、形の上からいえば、鏡というものが必要である。
これを心からいえば良心、あるいは直日の霊——省みるころ。これは個人的にも、社会的全体でもそう
であります。個人的のほうからいいますれば、朝晩鏡を見て「ああここに塵埃がたまつている、ここがき

たない」ということがわかる。しじゅう人間は内に省みることが肝要であります。これが潔斎をする大事な要点であります。

省みる心のうすい人、少ない人、これはモウだめです。こういう人はどうすることもできぬ。同じ誤謬をくりかえし、おなじ失敗をしておっても、いっこう省みないから進歩向上しっこない、同じところを行ったり来たりしておるだけである。省みる心の強い人は、いくら失敗してもだんだんと進んでゆく。

お宮は神さまを宿す所である。で、お宮にゆけばよく鏡を出してある。あすこへ人間が自分の心を写す、神さまがあすこに靈気をお降しになっている。誰でも鏡、直日の靈というものはもっているがそのままではわからぬ。鏡が曇っている時はわからぬ。いまの社会は正しいか正しくないかというようなことが見分けがつかないことがある。鏡をみがく、研ぐということが必要である。曇りきった鏡になると、自分でみがく力がない、元気がない。自力だけではいかない。そこで他力というものが必要である。すなわち神さまに研いでいただく、みがいていただく。

信仰方面でも最初は自分からほんとうに神さまを求めようと思う心よりは、助けていただきたい、なんとかここを切り抜けさせていただきたい、自分ではどうすることも出来ぬというような投げ出した気持ちから、信仰にはいる人も多いのであります。鏡をみがくということは、単に克己、修養だけではできぬ。そこに大きな他力がいる。で、信仰ということに徹底しなければ、潔斎ということも、清潔法もほんとうは行われたいものである、ということをもうしたのであります。

次ぎに罪障——めぐりと俗に申しますが、このことについて、ぐくざつとお話しいたします。

病気とか、その他人にふりかかる不幸、こういうものは何の理由もなしに来るものではない。そこに原因がある。原因があるから結果が生ずる。自分に何かあるか、社会全体のものを受けているか、家のものか、何か、やはり自分に関係があり、自分に受くべきわけがあつて受けているのであります。

めぐりを二つに分けると、人に付随しているめぐりと、場所に付随しているめぐりというふうに言えるのであります。たとえば、小さい時に蛇を殺した、そうするとその時はなんともなかったが、ある時になって毎晩蛇の夢を見るとか、あるいはその夢を見てから神経痛になるとかということがある。あるいは小さいとき猫を殺した、ところが、その時は何事もなかったが、その後になって、その人の家族が——その人がいちばん困るような人が、喘息のような病気になってゼイゼイいわねばならぬ——というようなことがあります。

たとえば、人に非常に怨まれた——男女関係のこととか、金銭の貸借のこととかで非常に怨んで死んだ。その怨みが相手にくる、あるいは相手の家族にくる。そうすると肺病になるとか、あるいはいろいろな病気になって苦しまねばならぬ。これらはみな、人に付いているめぐりであります。

それから、場所に付随しているめぐりというものがある。これは、たとえば墓場とか、人斬り場であつた所とか、何か不幸の多い場所とか、よく人の死ぬ踏切、あるいは身投げをする一定の場所、自動車なんかよく故障の起こる場所、そういう所は世の中にたくさんあるのであります。何となしに淋しいような、悲しいような気持ちでフラフラしていると、その場所に吸い込まれてしまふ——よく飛び込んだり、首を吊つたり、そういう場所は往々あるのであります。そういう場所には地藏さんを祀ったり、いろいろしています。別にそこで死んでもいいのに妙に皆そこに行つて死ぬ。須磨の浦には「ちよつと待て」という立札が

してある。この頃ちよつと下火になっておりますが、ひところ、非常に流行った三原山も一時なかなか繁昌しました。これらはみな場所に付随しためぐりである。そういう所には、そういう靈気があるからして、愉快な気持ちで行った人は引つかからないが、悲しみをもったり、共鳴点、感応点を持つて行った人はハッと引つかかってしまう。魚でも腹がへっているからつい食いついてつりあげられるように、自分に引つかかりがあるから飛びこんでしまう。こんなのは場所に付随しためぐりで、この二つのめぐりは、よく考えてみるに別ではない。そういう場所にゆき、そんな気になるというのが、その人にそれだけの因縁があるからだといえるのであります。

病気はことごとくめぐりである。ただ非常に深いか、浅いかだけである。原因が昔か今か、あるいは近いか遠いかだけではありません。ですから、信仰を基礎とせねばだめである。医療で一時癒つても、そのめぐりの因が取り除かれていなかったならば、また他の病気になる。自分が癒れば、また他の家族がなるというように絶えぬものである。で、病気は信仰を基とせねば、どうしても根絶できぬものであります。

一遍に取れる方法はないのでありますが、かりに「めぐりを除く方法」とこう名づけてここにあげますと、非常に、怨みとか執着の強かかっためぐりというものは、やはりそれだけ永くかからねばいかぬ。信仰にはいつても直ぐにはいかない。一生懸命それに対して対抗してゆき、その気持ちをやわらげてゆくようにして、自分に因があれば、覚えがあれば、その因をとり除くように努力せねばならぬ。自分には何の因かわからぬにしても、とにかく、なんか訳あつて起こるのだと覚悟して信仰によって他力の神さまのお救いを得るよりほかいたしかたない。信仰的になれば物事に感謝の気持ちができ、卑下した気持ち、反省心ができて、しじゅう謙遜の気持ちになれるからして、めぐりをつくる機会が少なくなる。人から怒まれたり、執着されたりするとうような原因をつくるような態度にでないようになる。人はえてして、得意な時代にはめぐりの因をつくり、種を蒔く。失意の時代、自分がつまらんと想着て、自分が一生懸命にやらねばならぬと思う時には決してめぐりの因を蒔かない。徳を積んでおり、徳の種を蒔くものであります。

深いめぐりになると時機を待たねばならぬ。簡単なめぐりは直ぐにのくが、何代も何代も前からつづいているのがある。ある家は当主の早死にが続く家とか、あるいは次々に子供が死んでいうつも養子をせねばならぬ家とか、あるいは家が絶えるとか、おなじ病人が何代もつづくとか、そういう例はたくさんあるのがあります。そういうものに対しては、非常に強い信仰と徹底した神業奉仕によるつぐないが必要です。

今までの世の中はめぐりを積む一方の世の中である。生きていううちにめぐりを祓うような行為をし、そういう気持ちになった人は稀である。ただ訳がわからずに、欲望の向くままに動いて死んだまでである。世界全体がそうですから、何代もかかってめぐりをたくさん積んでいる。この靈魂の清潔法ということは一番大事なことである。われわれがいう立替え立直しは、要するにこの清潔法のことである。大きくいえば、世の中全体を潔斎、修斎、修祓する、邪悪分子を一扫していい芽を吹かす、それが立替え立直しである。一家、皆それぞれあるのでありますから、覚悟をきめて早く取ってもらい、自分も早く元氣を出すようにせねばいかんのであります。

日本は神州清潔の民であり国であつて、非常に、清潔ということについては、どこの国にもないほど厳重であります。これは非常に結構でありまして、それでなければ、ほんとうに神さまの靈氣を受ける資格はできぬ。日本が尊いというのは、一つは清潔の国であるからである。

神道には修祓行事というのがあつて、はじめに祓戸四柱の神さまにご降臨をねがい、塩水と大麻をもつて

左右と三遍振って清める。これをちよつと見ると、つまらん形式だけのことと思う人があるかも知れないが、本気でお仕えすれば、神さまが降りてこられ、ほんとうに祓って下さる。神事でなくても、何か汚れを払うために自分で本気になって塩をふつても、それだけの効能がある。その気持ちを起こすとともに、清める一つのエネルギーがその周辺におよぶのであります。

塩（シホ）というものは非常に清浄なもので「シ」は水であり、「ホ」は火であつて、いわば水と火とが凝ったものである。塩そのものに科学的にものを吸いこみ清める力がある。インクをこぼしても、塩をそこに振ると吸いこむ。傷をしても塩をつけると早くよくなってくる。最後のたのみのカンフル注射も塩である。塩には一種のいい気をおこす力がある。

われわれが始終ご神前に奏上する大祓祝詞は天孫降臨の次第でもあり、また今の世を祓い給え、清め給え、という言葉でもあります。すなわち言霊の大麻であり、塩であります。

つぎに、病者、弱者の身代わりになつて千座の置戸を負う人、これは人の大麻であり塩であります。そういう意味で神柱というのは、みんなのめぐりを取つて、だんだん世を浄めていくというご用をしているのであります。

楽天主義

楽天と申しますのは、これは天命を楽しむという意味であります。天命、これを「性」といいます。つまり惟神の、それぞれ与えられた天職使命、それが「性」であり、天命である。命はおいいつけであり、すなわちのちであります。すべてのものに、人間とか動物ばかりでなしに、植物にも鉱物にも性があり、天のおいいつけがあり、そのもの独得のいきのみち、すなわち、いのちがあるのであります。一切がその性にしたがつて天地の化育に参じておれば、惟神にほがらかで楽しいのであります。

樹木は動けないけれども、それに対してそう怒つたり、不平的な意識なしに、自分のもっている天から命ぜられているだけのことを發揮することを何よりの喜びとして生きている。魚が水の中を泳いでおりますが、彼らにとつてはそれが天命であるから、非常に愉快に縦横に水中を馳駆して、ちつとも淋しいとも冷たいとも考えていないのであります。かく、楽天は「万物自然の心境」でなければならぬわけですが、人間だけは少し自由がきくものであるから、どうかすると悪い方にはいりやすく、天の命を汚しやす。自分の性とは違う方へはしりやすい。人間が理屈を言いだし、悪い方の邪気と一緒にだして、だんだんと心がねじけて神がわからぬようになり、この世が面白くないようになってき、ありがたくなつてき、わがままになつて来たのであります。文化や文明は進んでも、反対に靈性の方面は非常におとろえた。

楽天はもと万物自然の心境であつたにかかわらず、人類のみが、特にこれを強調せねばならぬというのは、それだけ純なるところがなくなつた。靈性が曇つてきている証拠なのであります。それが証拠には、おなじ人間のうちでも小児はいずれもみな楽天的である。楽天の気持ちである。あれがやはり自然のままに純であり、汚されていないからである。自分に執着もなければ、悪い欲望もない。しかし大きくなって、だんだん知識もできてくるほど、横道のほうに逸れがちになつてきているのであります。

信仰的利那主義というのは、デカダンのな放縦な快樂をおう、わがままなそのとき逃れの考え方、主義ではなくして、神さまを知つて、神さまにお任せをして最善を利那利那につくすという主義なのであります。ほんとうに神意を実行することができず、したがつて、真に生を楽しむことができないのであります。そし

てそればかりでなしに、しじゅう過ぎこし苦勞や取越し苦勞ばかりしている。すんだことはどうにもならない。これから後のことは人間の力でどうすることもできない。それであるにもかかわらず——それに対して準備するとか、悟るとかいうのなら結構でありますが一——いたずらに悔み、いたずらに心配しているという結果にすぎぬ状態が、信仰のない人々のありさまであります。

時というものは、ただ「今」——その「時」だけが本当に自由になる時である、自分のものである。時を領するといいますが、自分のものという時間は瞬間、刹那、その「時」しかない。それを生かそうと殺そうと、その人の自由である。すんだことや先のことは、いくらクヨクヨしたところで意味をなさない。「今」というものは、過去が積んで「今」になったものであり、過去の結果が現われたものである。「今」が延びてゆけば未来になるものであって、過去も未来も現在が積んでゆき、造ってゆくものである。「今」というものを本当に生ききる。充実しており、心身を打ちこんで「今」を有効に利用し、自分のものにする、こういう主義が信仰的利那主義であります。やけクソに自由にせよ、というのではない。むちゃくちゃに感情のままをやれというのではない。

神さまを信ずる人はほんとうに神さまの摂理というもの、おはかりというもの、善には善相応、悪には悪相応、ただ、いま来るか後に来るか知らぬが、とにかく神律というものは一分一厘も間違いないものであるとう確信をもっており、またそういうお力の存在もチャンと認めている。またこの世だけで人間の善悪の清算があるのでなくて、あの世に持ち越す、人間の靈魂は不滅であるという確信をもっているから焦らない。永遠の中の自分として、「今」として、それを尊んでゆき、自分を養ってゆく、培うてゆくという、そういう心掛けでゆくことができる。信仰がなければ、それはできない。楽天になれ、というても信仰のない人は克己、修養しても楽天になれるものではない。安心立命というものは神を認め、神とともに歩く形においてのみ認められるのであります。ただ、この神任せということと、依頼心というものは違うものであります。このことをよく知っておらねばならない。

神任せというのは、自分が最善を尽して「今」を生ききっており、あとはお任せすることである。これならほんとうに安心立命が得られる。が、依頼心は、ただ神さまに「頼む頼む」で自分は尽すべきことも尽さずに、何もかもお任せします、お願いいたします、というのである。これは間違いだである。で、信仰も逆になつてゐる。自分が神さまに導かれるだけの資格をつくらずにおつて「どうぞお導きください、私には特にご利益を下さい」ということを百万遍頼んだところで、神さまは知らぬ顔をしておられる。何でも「頼みます。こうして下さい。ああして下さい」と体のいい小使に神さまをしているのだ。で、資格をつくるということとをせねば信仰は向上せず、また真の樂天的気持ちにはなれぬものである。しじゅう最善を尽しておればよい。最善を尽しているか、いないかということ始終よく考えて、省みていねばなりません。

この意味において「人事を尽して天命を待つ」ということを昔からいいますが、われわれは神を主として「天命を知って人事を尽す」といいたい。神を知らねば何のための人生やら、死後どうなるやら、はたして因果応報があるやらないやら、腹が据わらぬわけであります。ですから、神を知り「天命を知って人事を尽す」べきであります。

最善の意味について、よく質問される方がありますが、ちょっとここで申しておきます。

子供の時の最善と青年になつての最善と大人になつての最善と、未熟の時と円熟しての時と、同じ最善でも違うのであります。子供の時にいいと思うておつたことも、後になつて悪いと思うようになることはある。

しかしそれはかまわない。そのときどきの最善を尽せばいい。後から悪かっても、その時に最善であったらかまわない。つぎつぎに最善というものの範囲とか、質とかいうものは変わってくる。その人進歩するほど高く深くなってくる。それでいいのであります。「きよう最善と思っていることでも、あす最善でなくなってもようございますか」といわれる人がありますが、ほんとうにその時の最善であったならば、それで悔いがないわけです。

それから、人に対し周囲に対しての見直し、聞き直しの生活ができるようにならなければ楽天は得られない。自分と同じようにならないからといって、人を怒ったり、排斥したりしていたのではこの世に生きてゆけない。ありのまま、なるがままを受け入れて、寛大な、ゆうゆうたる気持ちで天地とともに歩み、天地とともに呼吸し、永遠悠久の道を、永遠悠久の心で、生活する心構えがいきます。いわゆる「永相に坐し」た楽天でなくてはなりません。ただその時、その部分のみに囚われているのではなくて、大局を觀、永遠の真理を感じつつ、しかもその時々刹那の生ききつており、苦を苦としない大きな態度を「永相に坐す」と申します。

いつも楽しいばかりが楽天じゃない。苦しみや、悲しみはこの世にはあるものであります。大海に波が立つごとく、あるものである。あることを知ってそれに動ぜず、安心した落ち着いた行き方、歩み方、これが「永相に坐す」ということであります。

進展主義

進展は「いっさい行動の希望」でありまして、この世には動きがある。前いうた天命があり、性がある以上は、その性を発達さすべくすべてが動いている。これもそういうことを自覚するとせぬにかかわらず皆動いてゆく。蟻が夏、食物を穴の中に運んでいるのも蟻の動きである。蟻としての性をそのまま行っている。蟬が鳴いているのもそうである。花が咲いているのもそうである。それぞれ天命を営んでおり、天命を楽しんでいるのであります。

天命を楽しむ、営むという上においては行動がある。動きがないものはない。そしてその動きに目的があり、希望がある。それを共通点にみれば、よくなりたい。向上したい、進歩したい、進展したい、開発したい・・・そうした希望をもっていない行動はない。単に無闇にあっちこち往き来して動いているのではない。皆さんでも学校に行けば、よくしたい、憶えたいという希望がある。やはり進展的希望がある。商売をすれば、金を一文でも余計もうけたいと思う。嫁さんをもらえば、よい嫁さんをもらいたいと思う。いっさいは——これは人間だけじゃない——大宇宙ごとく動く動きがある。その動きのどっかに希望があり、目的がある。それは、よりよくなりたい、すなわち進展開発を目ざしているのであります。天地そのものが、絶えない進展、絶えない生成化育をとげており、より完全へと進んでいるからであります。進展は神慮である。神慮であるからして神の分霊分体たる個々のものにも、やはりそういう進展的希望がある。それで進展というものは誰にでも、何にでもなくてはならぬものである。ひとり人間のみでなしにすべての物にある。それは神慮であるというわけであります。ゆえに天地、衆生とともに進展を志すものは榮え、しからざるものは亡びるのであります。

進展には一本筋の進展でなくして、夜があつて今度は昼があり、吐く息があつて吸う息があり、飯をたべるといふこともあれば、クソをたれるということもある。それが順序よく適度に行われればこの世は結構で

ある。それが間違つて行われ、場所柄をわきまえず行くと、悪いということになる。で、絶対にクソもなくし、汗もなくするということはできない。美醜明暗混淆して進展してゆくのである。夜なしに昼ばかりにしたいといつても不可能である。男があれば女もある。右があれば左がある。それが適宜に序を追うて行われれば、それは善の世である。春夏秋冬、みなこれ仕様がないのであります。誰もふつうは冬を好まない。夏もあまり好かぬが、やはりそれがあるので、春がうれしいのである。ただ春のような日ばかりつづいたら、世の中はあまり面白くない。

進展にもその姿がある。一時、非常に困ったことがあれば、またパツと開くことがある。大いに窮した人は大いに通ずる。一遍も窮したことのない人は、理屈をいうておつても役に立たぬ。で、大いに楽しもうと思えば、大いに苦しまねばならぬ。その努力なしに、悩みなしに、恥なしに、一遍にほんとうの宝を得ようというような棚ボタ式の気持ちはいけない。

一切が進展して行くには、どういうふうな道筋があるか。一つは階段の道筋、もう一つは螺旋状、この二つが進展の軌道にはある。これはどういうことであるかということ、たとえて言いますれば、学校に行つてつぎつぎに進級してゆくのも、一年間は一年級という平面上をゆく。二年になる間際までは同じ平面であるが、新学年開始と同時に今度は急に前の級より一段のぼつた二年級という平面に住むことになる。これを繰り返して向上してゆく。これが階段状の進展である。

人間がこの世に生まれてから死ぬまでは、現界という同一平面を旅行しているのであるが、死とともに立体的に一階段、全然ことなつた世界へ身をおくことになる。その平面を卒業すれば、また上にのぼつてゆく。これが階段状である。

現代の物質文化も今や極度の行きづまりとなつて、この上は階段的に一飛躍をせねばならぬ時になった。螺旋状軌道というのは、春がきて冬になるまでは一回りしており、今度また一月一日がくれば去年のと同じ日が来ているかといえば、そうでない。螺旋状に一回りだけ進展している。「年々歳々花相似たり」で、草木は毎年同じような相似の状態におるが、しかし、前の時よりは今は成長しておらねばならぬ。また成長しているべきものである。年輪が一つ殖えている。おなじ形であり、同じ花が咲いているようではありますが、そうでない。進展している。そして翌々年はまたそれより一回り進展してゆく。こんなのが螺旋状の軌道であります。「歴史は繰り返す」とか、天災や景気、不景気等にもこうした螺旋状の軌道があるようです。すなわち、一切の動きにそれぞれの周期律があるわけです。

統一主義

統一は四つの主義の中でいちばん大事なものであります。統一の重要性、これは言わずしてわかると思いますが。統一がなかったら、すべてめちやめちやである。すべての生命、生命体、生命力は統一の状態において、はじめて完全に発育していくことができる。統一がなかったら芽を出すことも発育してゆくこともできない。だから、何よりも万物は統一を願う気持ちが意識的に、また無意識的にいちばん強い。

「統一」というのは、要約しますれば「中心帰向の調和相」とでも申しましょうか、物があれば、必ず中心がある。一軒家があれば家の大黒柱がある。人が住んでおれば主人があり、国があれば王がある。人間がおれば、統一の中心、頭がある。そしてその中心へことごとく帰り向かうというのは、その方へ引つ張らばられており、つられており、向かつており、連絡を保っている。これが遠心力であり、求心力である。これ

はすべてにある。これも単に人間にあるとか、一軒の家にあるとか、国にあるというようなものでなしに、全体においても箇々においても、いちばん必要な部分、肝要な位置というものがあり、これを囲んで種々の部分があるのであります。そして中心と部分、および部分同士の間には円満な調和がなければいけない。雑然として、むちゃくちゃに個々が勝手にやっているのではこまる。たとえば頭に対して、手や鼻や足などがそれぞれ連絡を保っているが、手は手で勝手に頭と連絡を保っており、鼻は鼻、足は足で勝手に頭と連絡をとっているのであれば、全体としての統一がとれない。それらが調和していなければならぬ。

そして天地は全一の統一体である。統一体であるから、宇宙の個々である小さい星も、あるいは分子も、電子もことごとく統一体である。宇宙そのものが統一体であるから、小宇宙である人間も統一体であり、人間の集まりである社会も統一体でなければならない。虫一匹、畳一枚、あらゆる分子、電子に至るまで、何一つとってみても統一体である。ここが面白いところであって、全体と単個、また個々相互間に機構上に相似がある。そこで共鳴とか、感応とか、同情とか、普遍とか、共通とかいうことがあり得るのであります。

大局的にみて森羅万象はおなじ大本元によって統一されている。大本元とは真神である。真神を知らねばほんとうの統一までには行けぬということになるのであります。ほかのものではなかなか統一ができない。万物共通の大本元、これを認め、これに順応してゆくという気持ちになれば統一は一番しやすい。

前述のごとく、まず中心が確立し、その周囲に個々があり、その相互関係が調和している時、ここに真の統一があるのであります。

二、大本の道 出口王仁三郎 聖師

四大主義

清潔主義―心身修祓の大道

天地にふさがる醜のくも霧を神やらひます科戸辺の神
はや川の瀬織津姫のみいさをに万の曲を流しきよむる
祓戸の神の坐さずば許々多久の罪や汚れのいかで払へむ
天地の神の宮居と生まれたる人の身魂ぞ清くもたまし
むらきもの心清けくもつ人はいつも天地の神にめぐまる
白梅の花の香の清さを保ちてこの世に生きむとぞ思ふ
身の垢は湯水石鹸であらへども洗ひがたきは心なりけり
天地の神の集ひし人の家は払ひきよまり塵ひとつなし

清潔主義（罪けがれ）

払はずば積もりて罪となりぬべし塵ばかりなることと思へど
塵ほどの罪過も重なれば身をほろぼすの種となるらむ
形ある宝に眼くらみなば罪にけがれし身とぞなりゆく
目をぬすみ宝を盗み日をぬすむ人こそ神のつみ人と知れ
道なくて得たる宝はたちまちに罪を残して逃げゆくものなる

人々の心に澄める月かげをかくすは欲と罪の雲なり
限りあるこの世に生きて罪つくり永遠の栄えを捨つる人あり
罪けがれ過失せじと朝夕に祈るは人のまことなりける
何事も神の御教に任すこそ罪を清むるたよりなりけれ
けがれたる時はなほ更つつしみて祓ひ清めて神を齋けよ
罪けがれ咎あやまちも朝夕の祝詞に春の雪と消えゆく

楽天主義Ⅱ 天地惟神の大道

天地の神の大道にしたがへば一さい万事樂しみとなる
惟神かみのまにまに何事も勤めゆく身に過はなし
人の世は日々の務めを怠らずたのしく暮らせ神のます世ぞ
人の身は神を離れて一日だも世に栄ゆべき道なきを知る
靈幸はふ神の大道をあゆむ身は世の憂きごとと樂と見る
ありがたし辱なしと朝夕に思ひくらせば曲事のなし
ゑらゑらに飲ぎはふ人の家は神の幸ひ自ら来たる
ゑらゑらに飲ぎ賑ひ栄えゆく家こそ地上の天国なりけり
吾といふものを捨つれば世の中は心安けく暮るるものなり
取越しの苦勞もなさず過ぎこしの苦勞も思はず刹那を進む
今といふいま善き心よき言葉よき行ひを上げむこそ善き
善きことを為すも思ふもたちまちに神の恩頼をかかぶる
言靈の幸はふ国に生まれ来て悔みなげくは醜の逆道
稲みのるための暑さを知らずして終日くやむ人のさはなる
わが年を指をりかぞへ老いゆくを悔む心はすでに死したり
思ふこと百分一もならぬ世と悔むは曲のさけびなりけり
くよくよと物事くやむ暇あれば大小となく行なひて見よ
今日もよし明日もまたよし何事も神の心にまかす身なれば

進展主義Ⅱ 社会改善の大道

進み行く月日の駒に神ならひわれは進展主義をとるなり
一刻もやすみたまはぬ天地の神にならひてわれはいそしむ
矢の如く月日の駒の早ければ空しく過ごすな惜きこの世を
かむながら神の柱とけ選られしみたまは一日も休む暇なし
進むのみただ一心にすすむのみ積極主義の大本の道
大船に真帆をあげたる大本は風吹くたびに進むのみなる
日に月に進展するはかむながら萎縮退嬰人ながらなる
恐るべきものはこの土に何もなし神のまにまに進む身なれば

御教に凡てをまかしすみ行く人はまことの神の御子なる
人生は日々新たに光明にむかつて改め進むべきなり
時により改訂修理をなさざれば如何なる事も世に遅るべし
人の身と心は用ふるたびごとに進歩発達するものぞかし
逆境に立つ身は大なる順境に向へるものと直に進めよ
宗教や政治経済ゆきつまりゆきつまりつつ岩戸開かむ
天地の一さい万事は完全にむかふ道程にあるものと知れ
山川も草木もかれむ世の中をよみがへらせよ神の光りに
大いなる世界の害をのぞくべく神に習ひて励めまめ人

統一主義Ⅱ上下一致の大道

統一のなき世の中はなにもかも麻の乱れの治まるときなし
順序あるところに神はゐますなり順序なければ道は乱るる
家内中一致同心なきときは団欒のたのしみ永久にきたらず
構成の力すぐれて強ければ一切のこと統一さるべし
真正の結合力のなき国は時じく内訌絶ゆることなし
地の上にあまたの国はありながら信ずる神は一つなりけり
進みすすみ多らぎ喜び魂を清めて一つ神につかへむ